

複式学級と単式学級における児童の運動意欲の比較検討

藤田勉* 小林稔**

Comparison Study of Elementary School Children's Motivation for Physical Activity between
Combined Class and Single Grade Class

FUJITA Tsutomu* KOBAYASHI Minoru**

1. はじめに

児童の運動意欲を理解することは、体育授業における指導の観点のみならず、帰宅後の屋外での運動遊びや生涯スポーツとしての運動継続といった豊かなスポーツライフの実現（杉山ほか，2001）に向けての基盤形成という観点からも有意義である。

しかしながら、指導経験のみで児童の運動意欲を理解することには限界があると考えられる。なぜなら、教師が評価する児童の運動意欲と児童本人が評価する運動意欲は必ずしも一致するとは限らないためである。指導経験に加え、科学的な視点から運動意欲の構造を把握することができれば、児童に対する理解がより深まると考える。

わが国における体育心理学の研究では、運動意欲の構造を明らかにする研究がなされ、男子の方が女子よりも運動意欲が高く、また、小学生から高校生というように、年齢が高くなるにつれて運動意欲が低下していくことが報告されてきた（西田，2004）。しかしながら、これまでに学級規模を考慮した研究までは行われていない。したがって、複式学級と単式学級では児童の運動意欲を同じように理解して良いのかどうか、そして、もし同じように理解できないことがあるとしたら、それは何故なのかということは明らかにされていない。

長崎県、鹿児島県、沖縄県といった多くの複式学級を有する地域において、赴任先が複式学級であるか単式学級であるかによって児童に対する理解が異なるであろうことを既に経験している教員も多いと思われる。そこで本研究の目的は、僻地・離島と都市部の児童の運動意欲を測定し、複式学級と単式学級で比較検討することとした。

2. 方法

2-1. 調査方法と対象

本研究は郵送法による質問紙調査法によって行われた。本研究の調査に協理解の得られる小学校を選定した上で調査票を郵送し、調査終了後に返送してもらうよう依頼した。調査票回収後の有効回答から、長崎県における都市部の児童 253 名、僻地・離島部の児童 514 名、鹿児島県における都市部の児童 146 名、僻地・離島部の児童 160 名、沖縄県における都市部の児童 236 名、僻地・離島部の児童 213 名、計 1522 名の 4～6 年生を分析対象とした。

2-2. 調査期間

平成 19 年 9 月～平成 20 年 2 月

2-3. 質問項目

運動意欲を測定する項目

猪俣・猪俣（1987）によって開発された小学生から高校生を対象とした運動意欲テスト（Motivation Inventory for Physical Education）略して MIPE（以下 MIPE とする）を使用した。主な質問項目は表 1 に示した通りである。

* 鹿児島大学教育学部 ** 琉球大学教育学部

各項目への回答方法は、「まったくあてはまらない(1)」、「あまりあてはまらない(3)」、「ややあてはまる(3)」、「よくあてはまる(4)」といった4段階の評定尺度法となっている。

MIPEの信頼性と妥当性については、猪俣・猪俣(1987)が信頼性を信頼性係数と再検査法によって検討し、妥当性を因子分析によって構成概念妥当性及び関連基準項目との相関係数の算出によって基準関連妥当性を検討し、いずれも満足し得る水準であったことを報告している。これはMIPEが小学生から高校生までに対応する標準化されたテストであることを意味する。

表1. 質問項目

下位尺度	項目数	質問項目(例)
1)自己概念	10	わたしは、すばやく動くことができる方である。
2)親和欲求	8	わたしは、一人で運動するより、グループで運動する方が好きだ。
3)競争欲求	5	わたしは、ほかの人と競争をするとき、いつも勝ちたいと思う。
4)価値観	6	運動は、健康のためになる。
5)達成欲求	6	わたしは、できない運動があるとできるまでがんばる。
6)活動欲求	5	わたしは、人が運動をしているのを見ると自分も運動したくなる。
7)失敗回避	5	わたしは、むずかしい運動はさけてやさしい運動をすることが多い。

運動頻度を測定する項目

本研究では運動意欲そのものの構造を検討するのみならず、運動意欲と日常生活の中での運動頻度の関連も検討することにした。運動頻度の指標としては、Prochaska et al. (2001)によって開発された青少年の身体活動量を測定する尺度を使用した。この尺度は、心臓がドキドキしたり息切れする程度以上の運動を身体活動としており、60分以上、この身体活動を、この1週間で何日実施したかという項目と、普段、1週間のうちで何日実施するかという項目の2問で構成され、0~7日で回答するものである。この尺度についての信頼性は折半法によって認められており、また妥当性は関連基準項目との相関によって認められている(Prochaska et al., 2001)。

3. 結果

3-1. 質問項目の分析

運動意欲を構成する7つの側面、すなわち、7つの下位尺度それぞれと運動頻度の記述統計(最小値、最大値、平均値、標準偏差、歪度、尖度)は表2に、各尺度の相関行列は表3に示した。相関行列に示した値は全て1%未満の水準で有意な相関である。

表2. 記述統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度
自己概念	9	36	25.13	6.32	-0.30	-0.58
親和欲求	8	32	25.89	4.82	-0.96	0.77
競争欲求	5	20	16.49	3.47	-1.03	0.47
価値観	6	24	19.62	2.97	-0.89	0.72
達成意欲	6	24	17.22	4.11	-0.37	-0.38
活動欲求	5	20	15.59	4.14	-0.71	-0.52
失敗回避	5	20	10.81	3.29	0.12	-0.49
運動頻度	0	14	8.35	4.25	-0.20	-1.11

各尺度の得点分布について、競争欲求は、-1.0を下回っており、また、親和欲求と価値観についても、-1.0に近い値であり、平均値が最大値に近い値であった。これは、これら3つの下位尺度に関する項目についての回答が4（よくあてはまる）あるいは3（ややあてはまる）に偏っていることを示している。

MIPEが標準化された検査法であることからすると、本研究の得点分布は高い方に偏りすぎている。しかしながら、猪俣・猪俣（1987）が尺度を開発したときの調査対象が小学生から高校生であったことや年齢が高くなるにつれて運動意欲が低下していく（西田，2004）ことを考慮すれば、本研究の得点分布の偏りは、運動意欲の高い発達段階である小学生のみを対象としたことによるものであったと考えられる。

尺度間の相関については、0.70以上の高い正の相関を示すものがあった（例えば、自己概念、達成意欲、活動欲求など）。これは、例えば、自己概念の得点が高ければ、達成意欲、活動欲求なども高い得点を示すことを意味している。

猪俣・猪俣（1987）は運動意欲に関する項目を92問作成し、それらの項目について因子分析を行った結果、第1因子として自己概念が抽出された。彼らは下位尺度間の相関を検討していなかったが、本研究では、第1因子である自己概念、達成欲求、活動欲求の3つの下位尺度は高い正の相関であった。このことからすると、これら3つの下位尺度は、猪俣・猪俣（1987）が定義する運動意欲の中核的な要素であると考えられる。

表3. 尺度間の相関関係

	1	2	3	4	5	6	7	8
1 自己概念	1.00							
2 親和欲求	0.62	1.00						
3 競争欲求	0.62	0.53	1.00					
4 価値観	0.65	0.70	0.52	1.00				
5 達成意欲	0.80	0.64	0.58	0.69	1.00			
6 活動欲求	0.77	0.61	0.63	0.66	0.74	1.00		
7 失敗回避	-0.36	-0.17	-0.14	-0.20	-0.32	-0.32	1.00	
8 運動頻度	0.45	0.28	0.32	0.29	0.40	0.41	-0.17	1.00

3-2. 複式学級と単式学級の各尺度得点の比較

次に、離島・僻地部における複式学級（分析対象は学校規模で5学級以下であること、複数の学年で1クラス、1クラスあたりの児童数は20名以下であることとした）の児童252名と都市部における単式学級（分析対象は学校規模で13～18学級であること、1学年で1クラス、1クラスあたりの児童数は31名以上であることとした）の児童236名の各尺度の平均値をt検定により比較した（表4）。

表4. 各尺度得点についての複式学級と単式学級の比較

	複式学級			単式学級			t	p
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
自己概念	252	24.55	6.42	236	24.99	6.38	-0.76	0.45
親和欲求	252	25.88	4.48	236	26.04	4.58	-0.38	0.70
競争欲求	252	16.47	3.34	236	16.39	3.56	0.27	0.78
価値観	252	19.33	2.96	236	20.16	2.82	-3.16	0.02
達成意欲	252	16.89	4.15	236	17.45	4.18	-1.49	0.14
活動欲求	252	15.37	4.07	236	15.86	4.21	-1.30	0.19
失敗回避	252	11.07	3.26	236	10.32	3.14	2.60	0.10
運動頻度	248	7.98	4.17	233	6.81	4.07	3.12	0.02

その中で、5%未満の水準で有意な差がみられたのは価値観と運動頻度であり、価値観については単式学級の方が複式学級よりも高い得点を示した。これは、単式学級の児童の方が複式学級の児童よりも、「運動は、健康のためになる」、「運動は、しょうらい自分のために役に立つ」(価値観尺度の項目より)など、運動をすることで何らかの有用な価値が得られると思っていることを意味している。また、運動頻度は複式学級の方が単式学級よりも高い得点を示した。これは、複式学級の児童の方が単式学級の児童よりも積極的に身体を使って運動をする習慣があることを意味している。その他の下位尺度については有意な差はなかった。すなわち、運動意欲のほとんどの側面について、両群は同レベルであることを意味している。

4. 考察

本研究では、MIPEによって児童の運動意欲を測定し、複式学級と単式学級の比較検討を行った。その結果、単式学級の児童の方が複式学級の児童よりも運動をすることに高い価値観を持つが、複式学級の児童の方が単式学級の児童よりも定期的な運動習慣を持つことが示された。そして、その他の運動意欲に関する下位尺度の得点に有意な差はなかった。これは、運動意欲の高さが学級規模の影響を受けていないことを示唆していると考えられる。

しかしながら、単式学級の児童が運動に対して高い価値を持つことと、複式学級の児童の運動頻度が高いことは、生活環境によって運動意欲を形成する場が異なることを示唆していると考えられる。なぜなら、単式学級の児童は学外での十分な運動量が確保できない生活環境にいる分、体育授業の中で運動に対する価値を高めることで複式学級の児童と同レベルの運動意欲を形成していること、一方、複式学級の児童の運動に対する価値は低いが日頃から自由に身体を使って遊べる生活環境にいるため、単式学級の児童と同レベルの運動意欲を形成していることが考えられるためである。

すなわち、本研究の結果は、運動意欲を形成する場が、複式学級の児童は学外の運動遊びが中心であると考えられ、単式学級の児童は体育授業が中心であることを示唆していると考えられる。

5. 今後の展望と課題

本研究では、僻地・離島部と都市部の児童の運動意欲をMIPEによって測定し、複式学級と単式学級の比較検討を行った。MIPEは運動意欲を7つの側面で表現し、それら各側面をある属性に分けて比較することはできる。しかしながら、どのような要因に運動意欲が規定されるのか、あるいは運動意欲がどのような要因を規定するのかを明らかにすることはできない。MIPEは児童の運動意欲の実態を把握する検査法であり、今後の体育指導を展開していくための基礎資料にはならないことを理解しておく必要がある。指導へ応用するための実践的な知見を提示していくためには、運動意欲の先行要因と結果要因を仮定した仮説モデルやそれに対応した測定法を検討していく必要があるだろう。

付記

本研究の趣旨にご賛同しご協力下さいました児童の皆様、各校の先生方、各市町村教育委員会の方々に深く感謝申し上げます。

文献

- 猪俣公宏・猪俣春世(1987). 運動意欲検査の標準化に関する研究. 昭和62年度文部科学研究費(一般研究C)研究成果報告書.
- J. J. Prochaska, J. F. Sallis, & B. Long (2001). A Physical activity screening measure for use with adolescents in primary care. *Archives of Pediatrics & Adolescent Medicine*, 155, 554-559.
- 西田保(2004). 期待・感情モデルによる体育における学習意欲の喚起に関する研究. 杏林書院: 東京.
- 杉山重利・高橋健夫・園山和夫・細江文利・木村清人編(2001). 新学習指導要領による高等学校体育の授業上巻. 大修館書店: 東京.